



「母の日」と聞くと、私自身が母であることよりも、亡き母のことを考えてしまいます。どんなに心配をかけたことか、どんなに大事にもらったかと、思い出すたびに切ない気持ちになってくるのです。いつまでも子どもの気持ちが抜けきれずに、今日を迎えているということでしょう。親の自覚が薄い私であるにも関わらず、「母の日」の午後にお嫁ちゃんが、ベランダで育てた花でブーケを作り、プレゼントと一緒に届けてくれました。なんて有難いことでしょう。小さい花々の柔らかい色と形が、心を和ませてくれます。優しい、美しい気持ちに感謝の思いでいっぱいです。母であることの幸せを感じずにはいられません。

私は薔薇の挿し木を趣味にしていますが、「一本の枝をチョキチョキと短く切って、土に差す」ということは、刃物を用いて、傷をつけ、切るという、残酷な乱暴な(?)作業をしていると言えます。植物は切られて、死んだようでも、土に植えられ、水を注がれ、光をうけて、不思議なことに新芽がでてきます。「命」を内蔵しているのです。私はその不思議さに魅了されているのです。我が家の薔薇は鉢植えですから、か細いような雰囲気ではありませんが、大切に育てていますので、精一杯咲き誇っている姿を、「よしよし」と愛でております。そんな薔薇をカメラに収めて、絵ハガキにして、病気の妹に送っています。葉書を送るに際し、聖書の言葉を添えることがあります。母の日が近かったので、「母」という言葉を選んで、書いて送りました。その箇所は [アダムは女をエバ\(命\)と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。\(創世記3:20\)](#) でした。

旧約聖書では、最初の男性アダムが伴侶として与えられた女性をエバと名付けたとあります。エバという名前の意味は「命」です。ちなみにアダムという名前は「土」という意味だそうです。なぜ「命」と? 「君こそわが命」という歌がありますが、そういうロマンチックな男女の愛の意味ではなく、「子どもを産む存在」として命名したと聖書は言っています。旧約聖書では女性は「産む性」であり、母となってこそ存在価値があり、個人の価値ではありません。歴史をつなぐためには「産む」という働きが不可欠であり、それゆえ「一人の女」であるよりも、「大勢の子の母」であるから大切にされたのです。男性中心の古代社会ではそのように見なされたのでしょうか。新約聖書では「母」と言えば、イエス様の母マリアを指します。貧しいけれども、信仰深い女性でしたが、夫に愛され、多くの子どもを与えられました。やがて寡婦となった女性として描かれています。

最近結婚披露宴のスピーチで「3人以上子どもを産んでほしい」と言った自民党議員がいて、問題視されています。妊娠、出産は女性個人の問題です。また、妊娠、出産、育児が十分にできる環境が整えられていないことが、今、日本の問題となっています。東京新聞の日曜版(2018. 5. 13)で、「母子世帯の貧困」が特集されていました。母子世帯の平均所得は全世帯平均の二分の一の270万円で、その8割が「生活が苦しい」と訴えています。働いても、男女の賃金格差があり、保育所不足があります。母であることを大切にするのであれば、「子どもを育てる環境整備」こそ、政治家が取り組むべき課題でしょう。

「命」と呼ばれたエバと同じ女性の私は、一人の子どもを産むことが出来ました。そのおかげで孫を与えられ、「命」の継承に与ったと感謝しています。けれども産まない女性もいます。自分の子どもを産まなくても、別の形で、「命あるもの」を産みだしている女性がいます。それは、命を大切にする生き方、命を守る生き方をするのではないのでしょうか。その生き方は女性だけでなく、男性にも可能です。ですから、彼らも、エバ、すなわち「命」と呼ばれてもいいでしょう。「母の日」に、すべての人に母がいることの幸せを感謝し、そして、「命あるもの」を生み出す人になることの大切さを考えさせられました。